

# 生ける自然

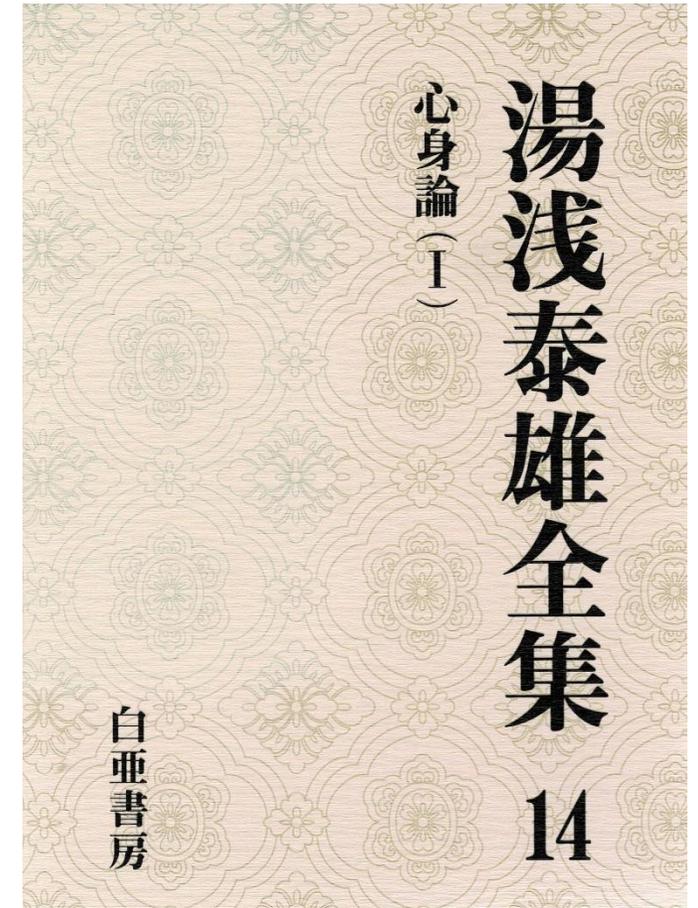
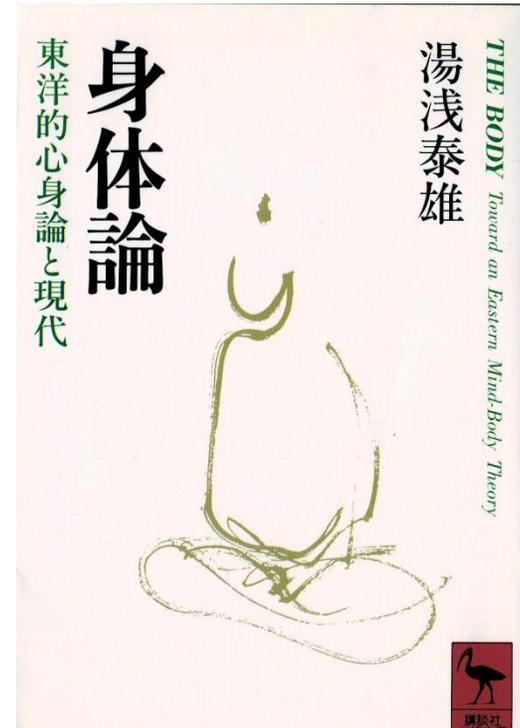
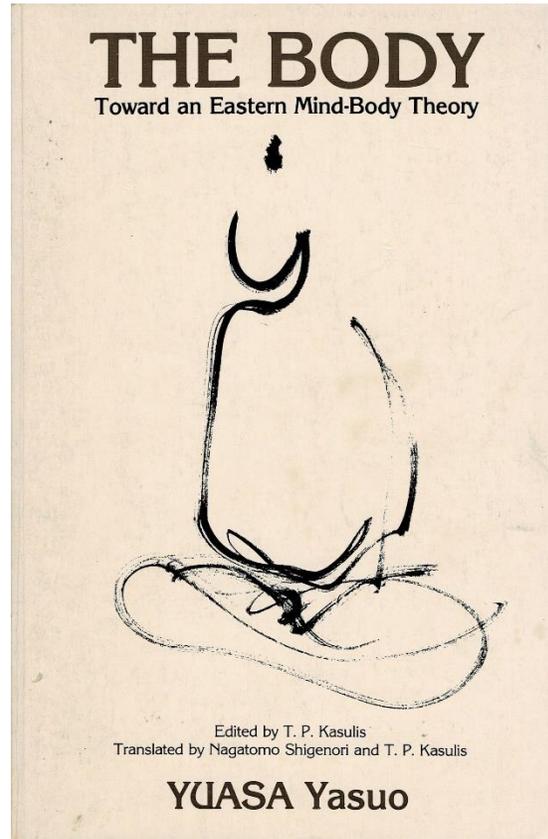
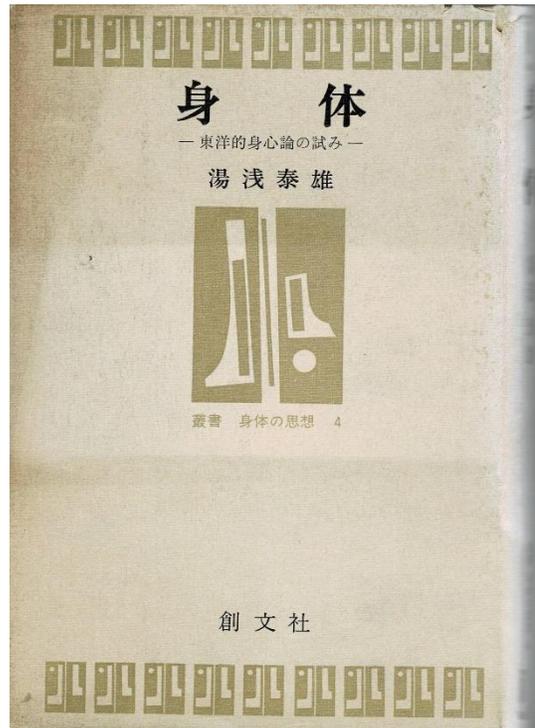
—人間存在の基本的条件—

倉澤幸久

# 湯浅泰雄『身体論』 人体科学会の理論的典拠

- 1977年 創文社版『身体—東洋的身心論の試み』
- ◇1984年 筑波日仏シンポジウム「科学技術と精神世界」ニューサイエンス
- 1987年 英語版 *The Body: Toward an Eastern Mind-Body Theory*, State University of New York Press
- ◇1988年 東京 日中シンポジウム「気と人間科学」
- ◇1989年11月人体科学会創設
- 1990年 講談社学術文庫版『身体論—東洋的心身論と現代』
- 1999年 全集版『湯浅泰雄全集第14巻 心身論( I )』白亜書房

# 湯浅『身体論』の各版



# 湯浅『身体論』が批判したこと

## ●近代的世界観における「身体」 デカルト(1596-1650)

主観－客観図式 自由な精神 vs. 形の限定を受ける物質・身体

・人間の精神 外界の物質的世界から自由で独立した存在

物質の有限性を超越した無限の主体的存在、人間の尊厳

・人間の身体 物質とされ、物質の因果法則に従う

病気は外の物質であるウィルス・細菌の感染、外傷

一つの機械、傷んだ部品は臓器移植で取り替えられる

→人間の精神・理性による自然(外界の自然、物質的自然)支配

→自然の豊かさから切り離され、空虚に

# 湯浅『身体論』が説いたこと

- 身体 単に物質でも機械でもない

自然・生命の豊かさ、生成の根源的エネルギーへの通路

自身の意識的自我を超出する豊かさを実現される基盤

身体を通して超越的なものが探究される

- 身体の暗い闇の部分 動物性・本能・情念・衝動・自然

人類は長い時間をかけてその闇を克服してきた

もう一度身体のその闇の意味と向かい合う

生の根源的受動性、人間存在の運命的制約の意味を問う

# 湯浅『身体論』の最後の二段落

- 東洋の哲学 近代科学とは逆の方向へ

人間の内なるたましいの世界をこえた**超越的次元、生ける自然**へ

**人間存在の基本的条件 人間の存在可能性の基本的境界**

- この道 学問的知識に乏しい凡ての人にかかっている ⇔ 近代科学

人間のたましいの底からひらけてくる閉ざされた神秘的道

- この道を科学との協力によって開く (→人体科学会)

この道は、**自然の隠された究極の秘密の領域、生きた自然**へ

西洋の形而上学と東洋の形而上学が一つに、新しい哲学への道

宗教と科学を調和する地平

# 『身体論』の中の「生ける自然」1

- **生ける自然** 人間の魂の底に広がる、  
人間存在を人間存在として可能ならしめる基本的な場所  
人間存在を人間存在として生み出す働き  
**内なる自然 根源的ないのちを生み出す働き**

- →新しい科学へ ユングとパウリの協力

ニューサイエンス 参照『湯浅泰雄全集第17巻』BNP,2012

F・カプラ『タオ自然学』原著1975, 日本語訳1979

D・ボーム『全体性と内蔵秩序』1980, 1996

F・D・ピート『賢者の石 -カオス, シンクロニシティ, 自然の隠れた秩序』1991,95

# 『身体論』の中の「生ける自然」2

- 従来の客観的科学

物理現象→生命現象→心理現象

新しい主観的経験の科学

精神界→生物界→物質界

- 外界の自然が**生ける自然**と見られる

目前の自然の真実の姿（諸法実相）

←通常の意識で見られる外界の自然

- 根源的自然が**生ける自然**と見られる

精神(魂)・生命・物質の区分以前の魂の底、深み

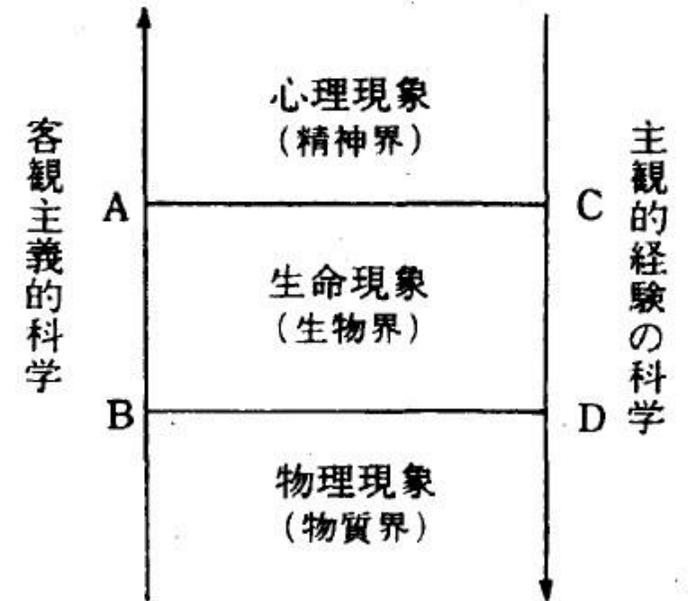


図10 現代科学の現状  
(湯浅泰雄『身体論』より)

# 『身体論』 「生ける自然」の語の由来1

- 和辻哲郎（湯浅の師） 『風土』の序文の引用

「(ハイデッガーの『存在と時間』を読んで)ドイツ浪漫派の「生ける自然」が新しく蘇生させられるかに見えている。然しそれは時間性の強い照明のなかで殆ど影を失い去った。」(『身体論』 31頁)

空間の具体的様相としての「風土」 = 「**生ける自然**」

- 和辻の『風土』における「**生ける自然**」

ヘルダー 「**生ける有機力**」自然の底にある神秘なるもの

シェリング 自然は生産性としての「**生ける自然**」としてある

マルクス唯物論 物は活力を保持している「**生ける自然**」

# 「風土」 = 生活世界的空間として捉えられた自然

- 和辻の自然観 ← 古代日本人の生の捉え方

心 = 身体 = 自然は不可分の一体性において存在

- 湯浅 和辻の「風土」「間柄」= フッサールの「生活世界」

- フッサール 「自然科学の忘れられた意味基底としての生活世界」 Lebenswelt 生の世界、生命の世界

「すべての生命体を包括する先験的問題の領域」

「自然の、真の、本来的な存在がその存在の意味を露呈する、絶対的連関における自然」「生ける自然」と言える？

# 『身体論』 「生ける自然」の語の由来2

- 西田幾多郎 『身体論』では「生ける自然」の語用いられない
- 西田の問題 非本来的日常的生の次元から本来的次元へ  
意識が意識の底に没入する  
=「**基体的制約としての身体**」について問うこと  
「**人間存在の基本的条件である生きた自然**」と重なる
- 西田の論文「論理と生命」  
我々の身体的自己 = 創造的要素 能動的になる  
= **歴史的生命の流**が我々の身体に漲る

# 西田『善の研究』における「生ける自然」

- 改版の序「フェヒネルは或朝(中略)、日麗に花薫り鳥歌い蝶舞う春の牧場を眺め、色もなく音もなき自然科学的な夜の見方に反して、ありの儘が真である昼の見方に耽ったと自らいっている。私は何の影響によったかは知らないが、早くから実在は現実そのままのものでなければならぬ、いわゆる物質の世界という如きものはこれから考えられたものに過ぎないという考を有っていた。まだ高等学校の学生であった頃、金沢の街を歩きながら、夢みる如くかかる考に耽ったことが今も思い出される。その頃の考がこの書の基ともなったかと思う。」

- 「純粹経験」= 実在の真景 = 古代ギリシア人の「**生きた自然**」

- 真の自然 = 一の統一的自己の発現、「**生きた自然**」

神 = 宇宙の根柢、唯一実在、精神と自然とを合一した者

= 一の「**生きた精神**」「**生きた自然**」として現れる

# 『身体論』 「生ける自然」の語の由来3

- ユング 『身体論』では「生ける自然」の語用いられない  
「集合的無意識」人間の魂の深みにおいて、何千年も変わらず  
存続する基底的な魂の事実
- 湯浅論文「心の種々の相」  
集合的無意識＝心と生命のはたらきをもった**生ける自然**
- 湯浅著訳『ユング超心理学書簡』  
「集合的無意識は**自然そのもの**」
- ユング論文「子供元型の心理学」  
「子供元型が、**生きている自然**それ自身から生まれてくる」

# 「生ける自然」 日本・中国の伝統的自然観に於いて

- 湯浅論文「心の種々の相」**生命的自然観**

神話のもつアニミズム的自然観、道教の自然観、  
中国仏教の無情成仏、特に禅宗の無情説法「溪声山色」、  
中国・日本の芸術表現に見られる生命的自然観

- 湯浅著書『気・修行・身体』空海について

宇宙は、靈的生命力にみちみちた**生ける自然**

- 湯浅著書『「気」とは何か』気にみちみちた自然界

気にみちた自然界 = **生きた生命的自然**

# まとめ 「生ける自然」とは

- 1.近代科学の「死せる自然」観に対し、生きている自然を取り戻す
- 2.和辻の他者と共に生きる具体的空間、「外なる自然」であり、  
西田の魂の深みにおける「内なる自然」でもある
- 3.ユングの「集合的無意識」、中国の「気」にみちみちた自然  
共時性現象や超常現象を説明する基盤
- 4.一の全体性・統一性を持ち、絶え間なく秩序を回復、自然治癒  
そのことの気づき、よりよい、より美しい、その本来の実現
- 5.近代科学の自然の脱靈魂化に対し、靈魂の復活。スピリチュアリティの問題
- 6.根源的自然のエネルギー 善悪あわせもつ ← 理性・論理の規正  
西田の「論理」、ユングの「カント哲学」の強調

この世界の真実の根源的捉え方→新しい生き方、新しい学の探究

「キリスト教的伝統の下では、自然ないし宇宙空間は、「神の似像」としての霊性を与えられた人間よりも下位にある被造物であり、したがって人間が精神の眼によって客体化できる存在である。（→近代世界、近代科学の発展）

しかし東洋においてはおそらく、自然空間の生命の鼓動につつまれて、動物と植物を含むすべての生命あるもの（仏教的に言えば「衆生」「有情」sattva）と共にあるということが、人間の生の本質的運命なのである。」（『身体論』43頁）

# F・D・ピート『賢者の石ーカオス、シンクロニシティ、自然の隠れた秩序』

- 世界全体が意味をもって生きている。生きている自然は複雑で繊細な情報の織物
- 宇宙の消滅と創造のたえまないプロセス
- 万物はたえず再生をくりかえし、すべては背後にある潜在的創造力の現れ、創造的な生きた自然
- 新しい倫理、自らの内なる自然を認め、周りの環境が本来もっている豊かさや創造性を認める

# 古代ギリシアの「自然」

- Φύσις(physisギリシア語)→natura(ラテン語)→nature(英語)

「ピュシス(自然)」=「万物がそこから生成し、そこへと消滅する万物の根源(アルケー)」、生命の元、それ自身が生きたもの内に生命原理としての魂(プシュケー)をもつ**生ける有機的自然** それ自身を覆蔵しつつ露現する「存在」「真理」「神」(ハイデッガー)

- 哲学philo-sophia 知を愛し求める 根源アルケーの知を求める

タレス「それは水だ」(アリストテレス『形而上学』)

哲学→諸学問・科学 前ソクラテス期の自然哲学者たち

# キリスト教の「自然」

- 神(創造主)―人間(神の似像)―自然(被造物) の序列

「キリスト教はいわば自然を殺した。これがキリスト教が果たした人間精神の解放という大事業の裏面である。」「キリスト教のみが実証的な自然科学と技術を可能にした。」(ベルジャーエフ『歴史の意味』)

- 「神は霊である」(ヨハネ4:24) 霊(プネウマ) = 神が創造と再創造とにおいて、生命を与えるために吹き込む息

神は被造物に生命力を与える生ける神

「主が近くにいてくだされば、人々は生き続けます。私の霊も絶えず生かしてください。私を健やかにし、私を生かしてください」(イザヤ書38:16)

**霊(spirit)**は「**生ける自然**」スピリチュアリティの問題としても

# 古代中国の「自然」

- 『老子』 「道」 万物を生み出す根源者

「道法自然」 道は自然にのっとる

「自然」 根源者のあり方 「みずから」と「おのずから」

道は無為であり、万物は自らの本来のあり方を実現

- 『易経』 「一陰一陽これを道と謂う」

「道」は「形而上」(現象以前、目に見えない)⇔「形而下」である「器」

「易に太極あり、これ両儀を生ず」 陰陽未分以前の「太極」

後に、太極 = 元氣 → 陰陽 → 五行 → 万物 (陰陽五行説)

「生々」を「易」と謂い、「陰陽不測」を「神」と謂う

# 仏教の「自然」

- 釈迦 仏陀(覚者)になる 世界の真実のあり方を知る  
自然を含めた世界は人間の分別により構築された世界  
仮構の世界の諸物に惑わされず、「本来の自己」に生きる
- 「自然外道」事物は不変の自性により在る、因果の道理を否定
- 『法華経』 → 日本天台宗 密教と習合 「自然覚了仏」・「本覚仏」  
天台本覚思想 「草木国土悉皆成仏」
- 『大無量寿経』 → 親鸞 「自然法爾」 阿弥陀仏は根源的自然
- 『大日経』 → 空海 胎蔵界大日如来 = 生命の究極の根源
- 道元 「山水経」「溪声山色」「無情説法」 山や川が仏法を説く

# natura naturans 生み出す自然 能産的自然

- エリウゲナ(810頃-877以降) 神学者・哲学者『自然について』  
神と被造物とを含む「**普遍的自然**」、根源的自然  
神は「**創造し創造されない自然**」←ギリシアの「ピュシス(自然)」
- ブルーノ→スピノザ→ドイツ・ロマン派「**生ける自然**」  
ブルーノ(1548-1600)「神」→「宇宙霊魂」=「**自然**」→万物の内の自然本性  
スピノザ(1632-77)「**神即自然**」「**natura naturans生み出す自然**」  
ゲーテ(1749-1832)「**生み出す自然・生ける自然・神なる自然**」  
シェリング(1775-1854) 自己形成的で有機的な「**生ける自然**」  
ドイツロマン派の近代を超える志向→西田幾多郎・和辻哲郎

# 道元禪師 最後の誓願

- 最後の病の中で書かれた『正法眼蔵』最後の巻「八大人覺」末「今、私は誓う、仏法を習学して生々世々にますます増長し、必ず無上菩提に至り、衆生のためにこの仏法を説くことが釈迦牟尼仏と等しくありますように、と。」
- 「発菩提心」(自未得度先度他) 菩薩として生きる、最後に成仏  
そもそも発菩提心←感応道交 仏の力に支えられて発心
- 「刹那生滅の道理」(瞬間毎の世界更新)・「因果の道理」(善因善果)  
仏が見出した世界の真実相に則して、仏が誓願して施設された「諸仏の常法」にしたがい、「仏のいのち」(「生死」巻)を生きる  
根底に仏の誓願力、その仏力に拠り、善を行い続けていく